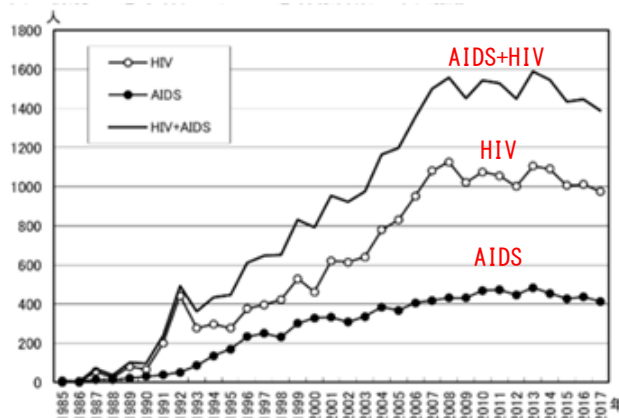




12月1日は「世界エイズデー」です

12月1日は世界エイズデー（World AIDS Day）です。エイズのまん延防止と患者・感染者に対する差別・偏見の解消を目的に、WHO（世界保健機関）が1988年に制定しました。毎年、この日に合わせて、世界各国でエイズに関する啓発活動が行われています。日本でもこの時期にAAA(Act Against AIDS)活動のキャッチフレーズである「エイズには『知る』ワクチン」（エイズの予防にはエイズについて知ることが最も効果的という意味です）を皆さんも耳にしておられるのではないのでしょうか。日本国内では、2000年代前半までは新規HIV感染者報告数は増加傾向にありましたが、2008年以降は報告数が横ばいとなっており、2017年は2007年以降初めて新規報告数が1000件を下回りました（右図）。また、HIVに感染してから5-10年は無症状であるため新規のAIDS発生報告は5年以上前にHIVに感染したことを意味しますが、AIDS報告数も減少し始めており、予防活動の成果が出始めていると考えられます。



日本の新規HIV感染者数、AIDS患者数の変化

本年度の世界エイズデーのテーマは、「UP DATE！エイズ治療のこと HIV検査のこと」となっています。HIVは治療の進歩が著しく、HIVに感染しても早期診断、治療の早期開始・継続によりエイズの発症を防ぐことができ、HIV陽性者の方々の生活も大きく変化しています。しかし、そうした変化が一般の方々に十分に広まっているとは言えず、得体のしれない病気、治療法のない病気等の古い認識がHIV感染を心配している人たちを検査から遠ざけ、また、差別や偏見を招く要因の一つになっているとも言われています。

そうした現状から、進歩するエイズ治療の現在とHIV検査の重要性を伝え、正しい知識を広め、HIV検査の受診を促進することで、HIVに感染している人がいち早く治療につながることを視野にいたしたメッセージとして設定されました。

我々、医療従事者もHIV診療を日常的に行っていないと、HIVに関する知識が古いままup dateされないことが少なからずあります。例えば、以前はHIVに感染後、免疫機構が破綻してから治療を開始とされていましたが、現在では感染が判明次第、治療を開始することが推奨されています。また、90年代後半には1日5回、合計約20錠の内服が必要だったのが、現在では1日1回、1錠内服というレジェンも登場しています。内服薬については劇的な変化が起こっていることを知っていましたか？

世界エイズデーが我々、医療従事者にとってもHIVのことを少しでも意識し、知識をup dateするきっかけになればと思います。掲載しているQRコードは、HIV検査を行っている施設を検索することができるページです。

